# 国際交流拠点「スマイル・サロン」を始めて

国際言語・文化学科
准教授　松田　美香

## 1 サロン開設の目的

本学では、全学生の約16%（2010年10月１日）を外国人留学生が占めている。多くの留学生を受け入れるようになってから約10年。その間、外国人留学生（以下、留学生とする）の学業と生活を支える学内組織は当初と比較して格段に整備された。事務局学生部留学生課、教員組織の留学生委員会、学科担任・日本語教員達、そして大学全体の尽力の結果である。

しかしながら、日本人学生と外国人留学生の間の交流はどうだろうか。昨年度に実施された「学生生活に関する満足度調査」の結果[1]を見ても、留学生が「日本人学生との交流に満足している」と回答したのは33.8%と低く、日本人学生の「留学生との交流に満足している」という回答も12.8%であった。また、日本人学生の「ふつう」という回答は63.7%であり、満足や不満足以前に関心そのものがいかに低いのではないかと読みとれる。同時に配布された『自由記述欄(抄)』[2]の「学内の人間関係について」の項目を見ると、日本人学生と留学生の交流上の問題点が浮かび上がってくる。その中に「日本人学生と留学生との垣根が高い」「留学生と関わる機会が少ない」「留学生は日本の勉強のためのみならず、日本との交流のためにも来たのに、その交流をしようと思っても、なかなかに日本人との関係が進んでいかない気がします。(ママ)」「日本人と話す機会が全然ありません。」などの、双方からの交流の必要を希望する声があった。

スマイル・サロンの看板の一面

報告者は日本語教育担当者として以前からこの問題に気づきつつも、これまではどうしても交流したい学生には国際交流会に入るよう勧めるだけだった。国際交流会とは、国際交流を目的とする学内の学生組織である。毎年数人の留学生は国際交流会メンバーと行動を共にするようになるものの、それは留学生全体数からすれば１%にも満たない数である。他のサークルや運動部でも留学生を受け入れているようだが、それにしてもこの数値はあまり高くないことが学内の学生達の行動からもうかがえる。

そこで、日本語教育研究センターも２年目を迎える今年春、留学生と日本人学生とが知り合うきっかけ作りと相互理解を進めるため、学内に国際交流サロンを開設することにした。

[1] 別府大学・別府大学短期大学部FD研修会『学生満足度の現状と課題』報告レジュメ１　報告者：利光正文・中川隆・東真千子・山本弘（2010.03.17　配布冊子）
[2] 『第１回（2009年度）充実した楽しい学生生活を送るための満足度調査―自由記述欄（抄）―』（脚注１の資料２）

## ② サロンの構成

このサロンが成立するには、国際交流会の協力が必要不可欠であった。日本語教育研究センターの会議で認められるのと前後してメンバーに誘いを掛けた。「国際交流をするサロンのようなものを、夕方の教室を使ってしよう」というだけで、他には何も決まっていなかった。

数人で何度かサロンについてのイメージの擦り合わせを行い、その際に決めたことは以下の７点である。

①外からもよく見えるガラス張りの教室を使う
②16：30 ～ 18：00にして、５限目の入っていない人が担当になる
③サロンには常に日本人学生がいて、留学生が来たら必ず会話ができるようにする
④気まずくならないように、何か飲み物を提供する
⑤ゲームなど、打ちとけやすいような小道具が必要
⑥来室者にはノートに所属と氏名を書いてもらう
⑦何でも書き込める自由ノートを用意する

以上の内容には、それまでの国際交流会の活動が反映されている。このサークルは、学内の留学生（別科日本語課程を含む）との交流を目的にしており、花見・料理会・ゲーム会など、さまざまな活動を提案・実行してきた。その他には、先述の歓迎会（ウェルカム・パーティー）の司会・進行やバス研修旅行時の同行・ゲーム係を日本語教育研究センター教員と行ってきた。その際、特に気をつけていることは、“留学生と共に”活動するということである。ともすると、日本人学生が留学生に活動を提供するような立場に立ってしまう。すると途端に留学生は受身になり、「次はどんな面白いことをするんですか？」とただ待つようになる。提供する側はアイデアを絞り出すが、次第にアイデアは尽きて、メンバーも疲弊してくる。過去に何度かそういう姿を見てきて、それは交流ではないと何度も学生達に言ってきた。

最初のきっかけ作りは日本人学生がするとしても、そこから先は対等にお互いがその場を作っていくような場をイメージし、ゲームを始めとしていくつかの候補を用意しておくに留めた。

## ③ サロンの開始

今年の５月末からサロンを始めた。午後４時10分の４限目が過ぎると、その日の担当者（２～３名）が１号館22番教室の机や椅子を移動して、いくつかを向かい合わせにしてテーブルクロスを掛ける。隣の教員室から看板、日本語の参考書や寄付してもらった本や漫画の入った移動式の本棚、ゲームやノートの入ったケース、湯沸かしジャーなどを持って来て黒板の前に設置する。おしゃれなカフェ風の看板は教室の前と１号館の入り口に立て、後は携帯電話から音楽などを流して客人(学生)を待つ。なかなか客人が現れないときは、壁に飾る寄せ書きの準備をしたり、ミニ会議をしたり、各々の急ぎの課題をしたりして過ごしている。

開始から約２カ月間で、延べ100人が来室した。これは、毎週水曜日には国際交流会の部会として行っており、その時だけ来る留学生が20人程度いることが大きい。他の日には留学生が来ない日も少なくなかった。来てくれるのは夕方にアルバイトの無い短期留学生の割合が高いのだが、女子寮はバスで10分弱、徒歩で25分程度（上り坂）の場所にあって、サロンに来ていると帰りのバスには乗れなくなってしまう。そのためか、女子寮の短期留学生はほとんどが水曜日の夕方のみの参加であった。他の時間帯に開くことも考えないではないが、４限目にサロンを開いてしまうと、待機する日本人学生がシフトを組みにくくなる。ここに、もう一つ深刻な問題がある。４限目が終わってから開くことによって、３限目で全ての授業が終わってしまう日本語の非常勤講師の利用が難しくなっているようだ。日本人学生だけではなく、留学生と交流したい誰もが自由に出入りできる場としてのサロンを考えていたのに、実際には時間や空間の制限に阻まれているのが現状である。

そう言いつつも、日を重ねるごとに毎日のよう

水曜日の国際交流会部会をスマイル・サロンで

に来てくれる留学生が出始めた。ひとりは、おもに31号館で勉強している別科日本語課程の台湾出身の男子学生である。彼は、別科の授業が終わって大学のメディアセンターでインターネットをする。それが一段落すると、サロンへやって来る。彼の目的は自分の日本語を使うことである。彼とはトランプゲームをよくしたが、百人一首もしたことがある。古典語は難しすぎるのではと心配したが、最初の文字で札を取るのが面白いらしく、思いのほか楽しそうだった。もうひとりは、国文学科の４年生で中国出身の男子学生である。彼がこのゴールデンウィークに故郷の上海で開催されている万博に行って来たと、その写真やパンフレットを持って現れたことがある。デジタルカメラには動画も入っていて、思いがけず上海万博を間接体験ことができた。また、日本語教育の勉強で作ったと言って手作りの日本語パネルを持って来て、「これは何でしょう？」と文法事項を聞くのだが、その画力ゆえになかなか当たらない。結局、日本人なのにわからないと彼にたしなめられて皆で笑い合った。彼は他のメンバーに溶け込んだ数少ない国際交流会の外国人メンバーである。三人目は、台湾出身の女子大学院生（日本語・日本文学専攻）である。彼女を連れて来てくれたのは、元別科教員の平山れい子氏である。平山氏はこの活動に賛同してくれ、親しい留学生達を次々に連れて来てくれた。その一人が彼女だった。最初の日は１時間程度で帰り、次もちょっと寄っただけという感じだったが、いつの間にか来れば最後まで居て、片づけを手伝ってくれるようになっていた。進路のことを話したり、台湾の食べ物や名所を紹介してくれたり、その日あったことを話したり、「日本語が上手じゃない」と照れながらも積極的に話してくれ、メンバーのお姉さん的存在になった。

この三人は毎日のように来てくれるようになったので、報告者も会う機会があり、このように紹介できるわけである。中にはすれ違いのように来ていた留学生もいるようだ。少しずつでも、毎日のように来てくれる留学生が増えていくことを願っている。

## 4 国際交流と地域交流の模索

７月中旬からは期末試験に備えるため、サロンは休止期間に入った。約２カ月間、国際交流会のメンバーは積極的に活動した。部長はほぼ毎日のようにサロンのシフトに入り、副部長は看板のデザイン、壁に貼る飾りや写真はもちろん、花や葉をたくさん作って来て、みんなを驚かせた。差し入れの手づくりのみたらし団子からも彼女の熱意が感じられた。会計担当はみんなに提供するお茶や紅茶の葉、スポーツ飲料や紙コップの消耗に気を配り、また水曜日の部会案を叩き、大らかな部長を補う働きをした。他の部員も積極的にシフトに入り、飲み物のサービスや準備・後片付けをてきぱきと行っていた。

この活動により、報告者は今までの週１回の活動を時折見ていただけの時とは全く違う印象を彼らに持つようになった。最初に誘い、少しの物質援助をしたのはこちらだが、その先はメンバー達だけで運営していると言ってもいい。そして彼らは周りの人々にも支えられている。元部長は現在大学院生で多忙だが、大小のゲーム類と漫画本約50冊は彼からの寄付である。終了間近にふらりと現れ、メンバーの様子を見て去っていく。また、非常勤講師の方々からの紅茶や本の寄付も嬉しかった。日本語の音声実験をしに来てくれたり、ゲームに参加してくれたりした講師の方もいた。短期大学部や国際経営学科の先生方にも数回来てもらい、サロンの紹介を兼ねてお茶を飲みながら話をした。他にもふと立ち寄ってくれた先生やメンバーの友人達との交流が嬉しかった。

さて、国際交流会以外の日本人学生はどうかといえば、メンバーの友人で、毎日のようにサロンに来るようになった日本人学生が２人いる。しかし、それ以外は「何をしているんですか？」と覗きに来たことはあるらしいが、実際に中で時間を一緒に過ごすところまではいかない。これをどうすべきか、これからどうなるのかはわからない。高い垣根は日本人学生にとってはまだまだ高いままなのか。しかし、無自覚から一歩進めることは（一石を投じたくらい）できたのではないだろうか。

次に地域との交流という課題もある。しかし、まずは学内の留学生と日本人学生の出会いと交流の場を作り、次の段階として地域との交流を考えているため、いわゆる宣伝活動はしていない。学内から地域へという順序が正しいのか、むしろ地域の人々が集まることによって学内の関心も高まるということはないのか。最近では、そのようにも考えるようになってきた。地域の人々と留学生の交流は、大家と住人、御近所付き合いという形があって、皆無ではない。しかし、それと異なる交流を求めて、わざわざ大学の教室まで足を運んでくれるような、どんな魅力が作り出せるだろうか。吉戸（2008）[3]は次のように大学の存在意義を述べている。

> 大学は文化の発信地でもある。ただここでいうのは、大学のなかから生み出されたものが、社会に文化として認められているという意味ではない。（中略）文化は常に変化し続けているものであり、『過程としての文化』に目を向けることが重要である。それを生み出し続けるのが大学と言う場である。

紅茶やスポーツドリンクを飲みながらおしゃべり

さらに「プロスポーツやオーケストラが完成された文化であるとしたら、大学は未完成の文化の代表的存在である。大学の繁栄が、社会の繁栄をよび込むのだ。」とも述べ、未完成の文化の発達過程をはぐくむのが大学の役目という視点を与えている。大学周辺の方々は、完成された学術的成果を見聞きしにやって来ることはあっても、未完成の文化らしきものを体験しに来たいと思うだろうか。何かしら事が成って（と思って）始めて大学の門をくぐってくれるのではないだろうか。だがもし、留学生と日本人学生と地域住民が一緒になることによって生まれる文化があるとしたら、それは大変面白いものになるに違いないだろう。

## 5 まとめにかえて

「スマイル・サロン」はまだ始まったばかりの活動である。運営主体である国際交流会の学生達は非常に熱心に取り組んでくれているが、その数はあまりにも少なく、将来に不安が無いと言ったら嘘になる。活動内容にもまだまだ改善点があるだろう。すでに個人的に留学生と深い関わりを持ち、満足している教員や学生もいることは承知している。しかし現状では、一方にあまりにも関わりが薄くて誤解や偏見を持つに至った日本人学生が多数いて、もう一方に習得した日本語を使う場所が無いことを嘆く留学生がいて、それらの不満を解消する仕組みが大学内に必要とされている。

このサロンを国際交流拠点として機能させ、新しい文化の発信をここからもしていきたい。そのためには様々な視点からの意見と、大学に関わる人々の理解と協力が不可欠である。批判も含め、大学ならではの知恵と知識を集める努力をしていく所存である。

[3] 吉戸智明「第４章　大学と教育」学術研究フォーラム編『大学はなぜ必要か』所収（2008年NTT出版　145p.）